『古代アメリカ』 7, 2004, pp.85-90

＜特集：調査速報 —2003 年のフィールドから—＞

エクアドル・ソレダー遺跡の発掘調査（第 1 次）

大平秀一
（東海大学）

1. はじめに

これまで筆者は、インカ国家とエクアドル海岸部の関係解明を主目的とし、エクアドル南部高地に位置するトメバンバと、スポンディルス貝（ムユ）の採取が可能なエクアドル海岸部間の領域において調査・研究を進めてきた（図 1）。この調査・研究の始まりは、1994 年、フボーネス河流域において実施した一般調査に位置づけられる。この一般調査の最大の成果は、インカ国家の行政センター、ミラドール・デ・ムユプンゴ遺跡が確認されたことであった（大平 1997, 1999; Odaira 1997）。ムユプンゴ遺跡は、トメバンバ南西方向約 50km のアンデス山脈西山系最西端の尾根上、標高 3200m の地点に位置し、遺跡からは肉眼で海岸（グァヤキル湾）を臨むことが可能である。遺跡の特徴と規模そしてロケーションより、ムユプンゴはインカ国家と海岸部の関係を考察する上で、極めて重要な遺跡と判断され、1995～1998 年の 4 シーズンにわたって発掘調査を実施した。その結果、聖壇ウシヌがインカ自身の手により一部破壊されていること、人工的に壁体が破壊され大まかな補修がなされていること、火災を受けた可能性が高いこと、重要な施設を配すべき場所が建設労働者の居住区として利用されていること、遺跡が建設途上にあったことなどが確認され、ムユプンゴ遺跡は、何らかの原因による武力衝突をともなって、建設途上で放棄されたという仮説的解釈が得られている（Odaira 1999, 2000）。

こうしたムユプンゴ遺跡の状況は、インカ国家による海岸部支配・統合放棄の可能性をも示唆し得るものであるが、これを実証していくためには、周辺域のコンテクストの中で比較・検討を加えていくことが不可欠となった。2001-2002 年、同遺跡西方（海岸側）に広がるアンデス西斜面を中心として一般調査を行ったところ、インカ国家の諸施設が良好に残存していることが確認された（大平 2003）。2003 年からは、確認された諸遺跡の発掘を進めていくという新たな調査の局面に入っている。

本稿では、このような経緯で、2003 年 8～9 月に行われたソレダー遺跡の発掘調査ならびに同遺跡周辺域で実施した一般調査・発掘調査の成果の概要を提示する。

2. ソレダー遺跡の発掘

ソレダー遺跡は、ムユプンゴ遺跡の南西約 6km の地点（標高：1778m、S：03,12,42、W：079,38,23）

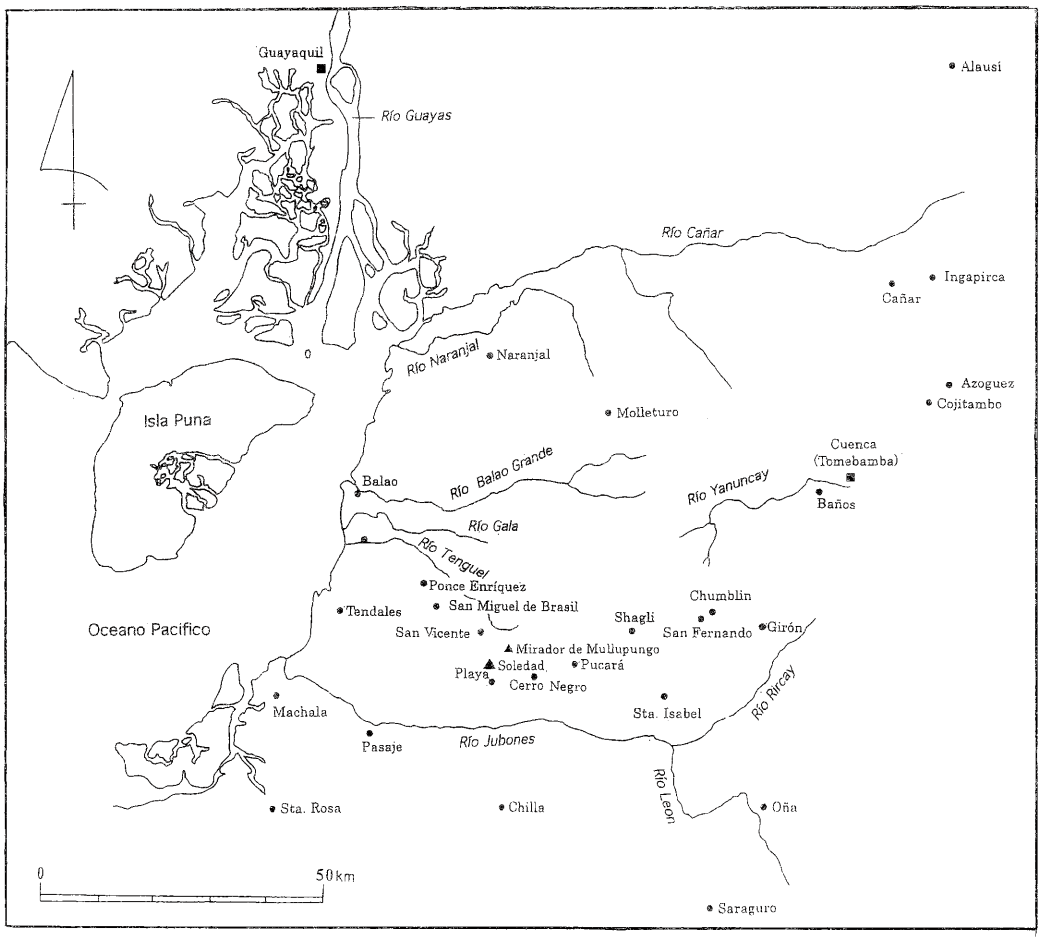

図 1　エクアドル南部

に位置し、遺跡全体は、現在のヌエベ・デ・オクトゥブレ村周辺に点在した状況にある。同遺跡には、ウシヌを伴う広場、聖なる丘、バーニョ・デル・インカ、居住域を構成していたテラス、岩陰を利用した墓域、畑地と想定される場所等が含まれ、いわゆるインカ国家の行政センターと判断される。

2003 年の発掘調査は、ウシヌならびに広場の一部と、バーニョ・デル・インカにおいて実施された。現在も村の共有スペースとして利用されているインカ期の広場は、二つの小高い丘に挟まれた尾根上に建設されている（写真 1）。マチュピチュをはじめ、船底状の地形にインカ国家の施設がおかれる事例は少なくないが、本遺跡も同様の特徴を呈している。この広場は、長さが約 150m、幅が 25m 程度の細長い形状で、南側から北側に向かって下る段差が 4 段認められ、中央部分よりやや南側（南から 2 段目）に、ウシヌが配されている。発掘前に認められたウシヌの特徴は、基壇がほぼ円形に近い楕円形（長辺 4.7m、短辺 4.8m）を呈しており、一般的にウシヌに伴う階段やカナル等の痕跡は確認できなかった。このような特徴は、ムユプンゴ遺跡のウシヌと共通している。

ウシヌの発掘は、構築状況ならびに儀礼痕の確認を目的としてなされた。このウシヌは、かつて

村の水場として利用されていたこともあり、特に基壇上部において大きな破壊を受けていた。しかしながら、発掘によって、少なくとも 90cm 以上の丘状の基壇が赤色土によって構築されていたこと、発掘前に観察された諸特徴がオリジナルのものであることが明らかとなった（写真 2)。ウシヌの中央部分、表土下約 60cm のレベルでは、直径約 35cm、深さ約 20cm の円形の穴が検出された。上部が激しい攪乱を受けていたとはいえ、内部に堆積した土の状態から判断すると、この穴はおそらくウシヌ上部から切り込まれたものと考えられる。この穴からは遺物が出土せず、カーボンの集中が検出されたのみであった（写真 3)。クロニカの記述および民族誌と対比して考えれば、儀礼品を燃やした痕跡として捉えることが可能であろう。ウシヌ周辺においても発掘を実施したが、ペルー海岸部のように遺骸等は検出されなかった。

広場では、床面構築状況を確認するため、南から 3 段目のテラスに 3×3m のテスト・ピットを設定して発掘を行った。この結果、表土下 20cm 程度のレベルで、こげ茶色土に石灰岩質の岩の破片を混入させた床面が検出された。この床面の厚さは 10cm 程度で、長期にわたって使用された痕跡は認められなかった。この床面下部には、赤色土が検出され、少なくとも 2m にわたって堆積している。この層からは、遺物が 1 点も出土しなかったことから、現段階においては地山である可能性が高いと判断される。さらなる考察を要するとはいえ、現段階における判断が正しいとすれば、ウシヌは構築されたというよりも、自然堆積の土を削って基壇の形状に整えられていることになる。

一方、バーニョ・デル・インカに関しては、同施設が配されたテラス部分も含め、およそ 160 ㎡の発掘を実施した。この結果、加工途上の石ブロック、ならびに加工の際に生じた石の破片などが検出され、カナル等はまったく確認されなかった。また、バーニョ・デル・インカの床面には石敷が認められず、壁は明らかに構築の途上にあった（写真 4)。こうした状況から、バーニョ・デル・インカが建設途上の段階にあると明瞭に判断された。

広場からの出土は限定的であったものの、バーニョ・デル・インカ周辺においては比較的多くの土器片が出土した。これらは、ムユプンゴ遺跡とほぼ同様の特徴をもつ粗製土器が大半を占めており、製作集団・場所、そして分配の基点が同一であったことを示唆している。

3. ソレダー遺跡周辺域における一般調査と発掘

ソレダー遺跡の発掘終了後、周辺域の一般調査も実施し、バーニョ・デル・インカ、丘上のテラス群、儀礼と関連した岩場、土壙群など、インカ期の諸遺跡が新たに確認された。この内、ソレダー遺跡の北西方向約 2km の地点に位置するポルボラ・バハにおいて、土壙 1 基の発掘調査を実施した。

この土壙は、表土から 30cm 程度の落ち込みにより確認されるものである。同じ特徴をもつ土壙は、2001～2002 年の一般調査時に、海岸に向かうゾーンのみにおいて、複数の場所で多数検出され、概算で 3000～5000 は構築されているものと想定される。これまで、複数の場所で 10 基の土壙の発掘を行い、インカ期において構築されていること、基本的に墓の形は掘り込まれた面より下部において膨らんでいること、径が最大で 1m～1.5m 程度深さが 1～2m 程度であること、蓋状の石が上部に置かれていること、立てられた石組みが配されていること、底部にも石を配している場合があること、掘られてすぐに埋め戻されていること、基本的には内部から遺物が出土しないこと、儀礼を行

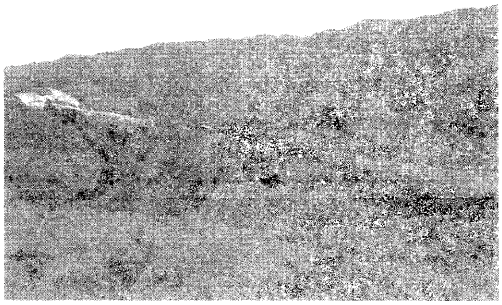

写真 1　ソレダー(SL)遺跡　広場遠景

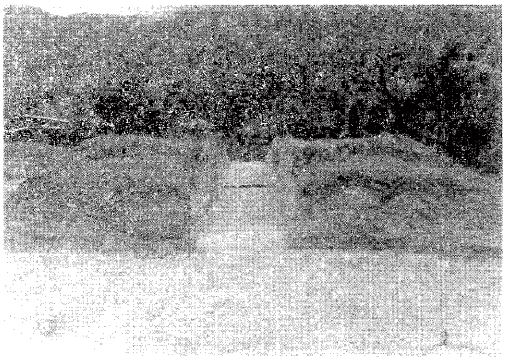

写真 2　ウシヌおよびトレンチ(SL)

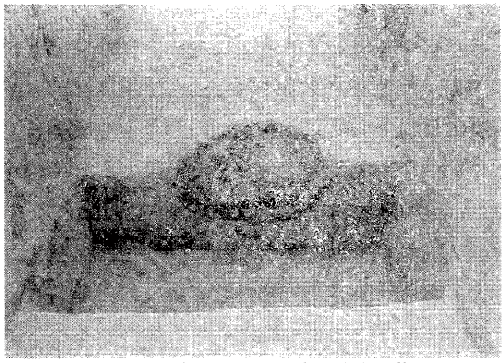

写真 3　ウシヌ中央部掘り込みと炭化物出土状況

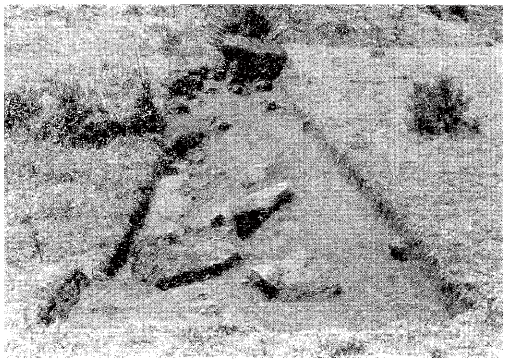

写真 4　パーニョ・デル・インカ南部分(SL)

写真 5　ポルポラ・パハ(PB)墓　半切後の状況

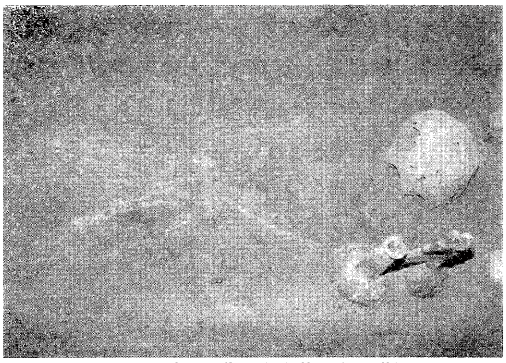

写真 6　人骨ならびに副葬品出土状況(PB 墓)

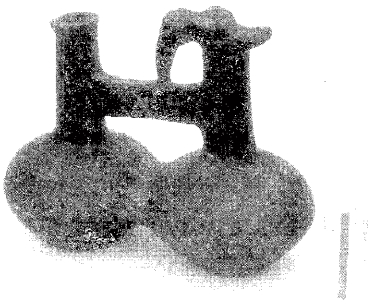

写真 7　チムー・インカ様式の土器(PB 墓出土)

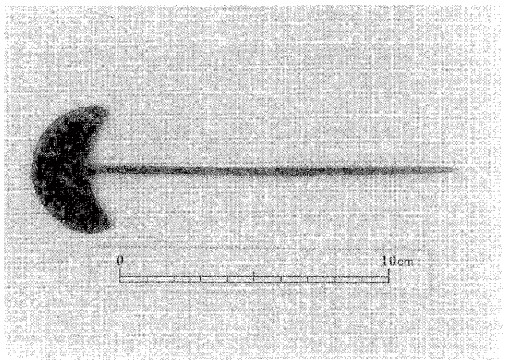

写真 8　トゥプ(PB 墓出土)

った痕跡が認められることなどの特徴が明らかになっている（大平 2003:31-42, 44-46）。しかしながら、現段階において、これらの土壙の意味は明らかになっていない。形状から、墓の可能性があるとはいえ、人骨の破片すら出土しておらず、さらなるデータを蓄積していくことが不可欠な状況にある。ポルボラ・バハにおける土壙の発掘は、こうした経緯で実施された。

発掘の対象とした土壙は、セロ・ポルボラの南側に位置している（標高：1497m、S：03,12,05、W：079,39,02）。これまでの事例では、土壙内外の判断に困難が伴うため、表土から確認できる落ち込みを半切するように、2×1mのトレンチを入れて断面の情報を得、残り半分に関しては土壙内部のみを発掘するという方法がとられた。発掘の結果、この土壙は 60cm 程度の浅いものであることが明らかとなり、内部からは何も出土しなかった。しかし、最初に設定したトレンチの発掘過程で、土壙とは関連性のない表土下 20cm の地点で、石が混入した緑灰色の土が検出された。この脇に、大きな盗掘痕があったため、盗掘の際に出た廃土と判断し、そのまま掘り下げたところ、表土下 55cm のレベルで一部が陥没して空洞部分が検出され、土壙に隣接しているとはいえ、別個に構築された墓が 1 基確認された。

この墓は、まず直径約 65cm、深さ約 90cm の円筒形の穴を掘り込み、それから東方向に、高さ 1m、径 1.3m（南北）～1.1m（東西）のドーム状の墓室を構築している（写真 5）。最初に掘り込まれた円形の穴と墓室の間には、板状の石の蓋を配していたことが明らかである。出土状況より、被葬者の埋葬は、南東方向を向けた座位屈葬でなされた判断される（写真 6）。右側頭部には、大きな損傷が認められた。遺物から判断すると、女性である可能性が高いと想定される。今後、人骨の分析を行って諸情報を得ていく必要がある。この墓からは、チムー－インカ様式の鳥装飾付黒色橋型双胴壺 1 点（写真 7）、鈴 4 点、金属製のトゥプ 1 点（写真 8）、ピンセット 1 点、骨あるいは貝製ビーズ 1 点、石製ビーズ 1 点が出土した。ただし、副葬品として納められたのは土器のみで、その他は被葬者が身につけていたものと想定される。

4. おわりに

ムユプンゴ周辺域には、わずか 6km の距離を隔てて、ムユプンゴとソレダーという２つの行政センターが配されており、特異な状況を呈している。2003 年度になされたソレダー遺跡の調査により、インカ国家の行政センターの中で主幹的施設といえるバーニョ・デル・インカが、建設途上で放棄されていることが明らかとなった。これは、ムユプンゴ遺跡の発掘調査を通して得られた成果と共通するものであり、インカ国家とエクアドル海岸部の関係を考える上で、きわめて示唆的なデータといえる。

ポルボラ・バハにおいて検出された墓に関しては、周囲のコンテクストを入念に考察し、その意味あいを考えていく必要がある。墓の検出状況は、いまだに意味が明らかになっていない土壙と墓の関連性を示唆するものとして着目されるが、今後さらなるデータを蓄積していかなければならない。ソレダー遺跡ならびに周辺域の発掘調査は、2004 年度以後も継続して実施する予定である。

【謝辞】

2003 年の調査は、科学研究費補助金（基盤研究 B<2>[海外学術調査]、研究課題名:「インカ国家

とエクアドル南海岸域の関係をめぐる実証的研究」、研究課題番号:15401027）によって実施された。同様に、1994～1999 の調査（含遺物整理調査）は出光美術館の調査・研究費、2001～2002 の調査は科学研究費補助金（基盤研究 C<2>、研究課題番号:13610473）を得て実施された。また、2001 年および 2003 年には、東海大学総合研究機構研究奨励補助金、さらに 2002～2003 年には、東海大学文学部教育研究補助金を受けた。また図版作成に際し、本研究課題の共同研究者である森下壽典氏（早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程）のお世話になった。ここに銘記して、皆様に深謝申し上げます。

参考文献

大平秀一

1997 「エクアドル・ユンギーリャ谷におけるインカ調査」『出光美術館研究紀要』第 4 号 pp.15-89

1999 「インカ社会と『価値の高いもの』―スポンディルス貝をめぐって」『出光美術館館報』107 号 pp.4-28

2003 『エクアドル南部のインカ帝国に関する実証的研究』 2001-2002 年度科学研究費補助金基盤 C（2）成果報告書

Odaira Shuichi

1997 Mirador de Mollepungo: un sitio Incaico en el Sur de la Provincia del Azuay, Ecuador. *Fronteras de Investigación*, Año I, No.1, pp.72-77.

1999 Un Aspecto del Control Inca en la Costa sur del Ecuador: una evidencia encontrada en Mirador de Mullupungo. *Tawantinsuyu:an international jounal of inka studies*, Vol.5, pp.145-152.

2000 Excavaciones del Mirador de Mullupungo: Nuevos datos de la relación entre la costa y los Incas. In *Estudios Latinoamericanos en Alemania y Japón*, edited by Shozo Masuda, pp.201-202, Fundación Shibusawa para el desarollo de la Etnología, Tokyo.

原稿受領日 2004 年 03 月 02 日